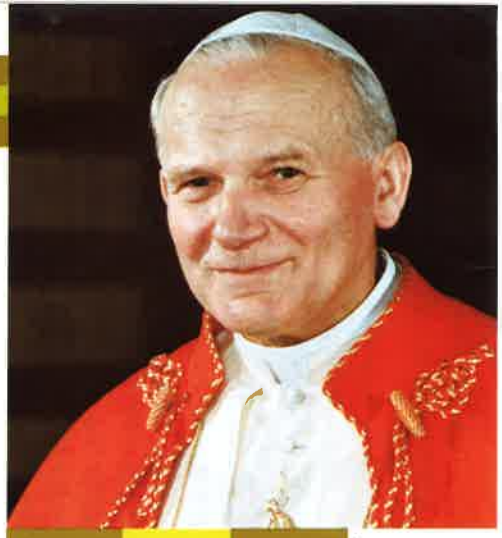
8
平成6年（1994年） 8月10日 教皇様の声 （昭和59年10月1日第三種郵便物認可）
AUGUST,1994 毎月10日発行 第172号



教皇様の聲

人類の前途は？

（教皇様は来たる「人口と発展」国際会議の動向について、憂慮と驚きを覚えたことを表明された。会議案は、性と家庭に関して人間生命の占める重要性に疑問を付していたからである。）

兄弟姉妹の皆さん。

1 すでに全世界の元首にあてた書簡で、9月にカイロで開かれる国連主催の「人口と発展」国際会議が示し始めた方向性についての懸念と驚きを表明する機会を得ました。

人類への非常に重大な問題が突き付けられている今日、この会議の重要性については誰もが気づいています。事実、会議で取り上げられるのは経済学や社会学の専門家や政治家のみに委ねられるような、社会生活の単なる「技術的」構造ではありません。私たち全員に直接関わってくる、極めて重大な問題を扱っているのです。性及び家庭という決定的な領域における人間の生命という概念が危うくなっています。このような極度に複雑で入り組んだ問題については、誰も自分は関係がないかのように無関心でいることはできません。

だからこそ今日、私の抱いた深い懸念を重ねて強調し、良心と自由な心を持つ全ての人に、政治や経済の論理に従って判断するが如き誤りは避けるよう訴えたいと思います。拡がりつつある愚劣な自由と偽りの進歩の理想に抵抗する全ての人に向かって話しています。自由や進歩と言っても、よく考えれば隷属と退歩であることがわかるでしょう。それらは人間性、生命の神聖さ、真に愛する力をむしばんでいくからです。道徳法の侵害は決して勝利ではありません。人間にとって大きな挫折であり、自分自身がその犠牲になってしまうでしょう。

2 家族年にあたり、世界人権宣言の主張する原則が再び取り上げられ、主張されることを期待します。「家庭は社会の基礎となる共同体である。」（16条3番） 家庭はその性質上、思いのままに形を変えることはできないのです。家庭は人間の最も基本的で神聖な遺産です。家庭は国家に優先します。国家は家庭の優位を認め、明快で分かりやすく見過ごしの余地のない倫理的、社会的行動によって家庭を守る義務があります。

家庭を脅かすことは人類を脅かすことも同然です。「堕胎の権利」について語られるようになればいよいよ脅威であると言わざるを得ません。今日では、快楽を求める自由放任的な文化が生み出した行動モデルがあり、無私の献身や本能のコントロール、責任感など時代遅れだと思われています。今すぐ反対して立ち上がらなければなりません。こんなふうに倫理的に自由放任の風潮が進んだら、社会はどうなってしまうのでしょう？ 人類の前途に不安を覚えるような悪い兆候が、もう出ているのではありませんか？

3 こうした数々の問題を御母マリアに委ねると共に、全人類と個々の人間にとって真に善なるものを心にとめる全ての人がよく考えるべき事柄として提示します。悲観に走ったり、大騒ぎするつもりはありません。ただ、このような重大な事柄については、私の至上義務として引き続き教会の声を高らかに響かせる所存です。どうか祝された処女が人々の心に語りかけ、イデオロギーや政治の壁を越えて私の言葉を届けてくださいますように。全てまことの善意の人々の間に新たな同意が得られますように。

（四・十七、レジナ・チェリの祈りで。）

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済
© 1994

発行所
財団法人■精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
TEL 0797-31-3452・FAX 0797-31-3448

被昇天の聖母を呼び求めよう

★「主よ、御身はマリアの内に希望のしるしを輝かせ、旅路にある御身の民を慰める。」（被昇天の祝日の序唱）

聖母被昇天の大祝日に、教会はミサ典礼の祈りへと招きます。

昔から常に信者たちの間には、マリアが体も霊魂も共に天国に上げられた、という生き生きした信仰がありました。福音が伝えられた所ではどこでも、被昇天の出来事は真実として受け取られてきました。八月十五日をマリアの「御眠り」の祝日と定めたのは東ローマ皇帝マウリシオ（582～602）です。西方にも他のマリア記念日と共にこの祝日が教皇セルジオI世（687～701）によってもたらされました。

周知のように、一九五〇年十一月一日、ピオ十二世は聖母被昇天を神の啓示による「信仰の教義」と定めました。第二バチカン公会議はこの決定を受けて、「原罪のいかなる汚れにも染まらずに守られていた汚れない処女は、地上生活の道程を終えて、体と霊魂ともども天の栄光に引き上げられ、そして主からすべてのものの女王として高められた。それは自分の子によりよく似たものとなるためであった」（教会憲章59番）と断言しました。

★従って私たちは、キリストの御母であり私たちの霊的母である聖マリアがすでに天国にあり、キリストと共に肉身と霊魂ともども神の永遠の幸福を享受し

ておられることを確信しています。地上を旅する私たちは「まだ罪を克服し聖性において成長するよう努めて」（同65番）おり、天にあげられたマリアを見上げ、マリアの光を受けてその教えを聞き、聖母のやさしさに信頼し、いつかは聖母の栄光にあずかる約束と期待のうちにその徳をまねるのです。

栄光を受けた聖マリアの素晴らしい輝きは、全人類への決定的な呼びかけです。完全な信頼をもって神の御言葉を信じ、贖い主キリストと親しく一致して生きたマリアは、存在の真の意味は地上の事物を超えること、また現世の物質的な現実は永遠という展望の中に置かれた時、初めてその真価を認められることを教えてくれます。

★（…）「倒れては起き上がろうともがく御身の民をお助けください！」　回章『救い主の母』で私はマリアに訴えました。今日被昇天の祝日にあたり、繰り返し全ての人に願います。「救い主の愛すべき御母」を呼び求めてください。教会は「人類の歴史に深く関わるマリア…母の愛をもって、多くの複雑な問題を抱える現代人、その家族、その国と苦しみを分かち合うマリアを見つめます。マリアが善と悪との間で絶えず戦うキリスト者たちを助け、『倒れない』ように、もし倒れたら『再び起き上がる』ように守っていることを知っているからです。」（『救い主の御母』52番）

（八・十五）

ご変容・・勝利の前味

「イエズスはペトロとヤコボとその兄弟ヨハネを連れて、人里離れた高い山に登られた。そして、彼らの前で姿が変り……。」（マテオ17・1～2）

●兄弟姉妹の皆さん、（本日はキリスト変容の秘義について考えてみたいと思いますが、）この教会では特に、祭壇の上に掲げられているあの大きな絵によって、絶えず思い起されることでしょう。あの絵は教皇ピオ十一世から贈られたものですが、ラファエロの傑作の模写です。絵の中心はイエズスの姿で、「顔は太陽のように輝き、服は光のように白く」なりました。福音書は「彼らの前で姿が変り」と語り、ルカはこう詳述しています。「ペトロとその仲間たちは眠くて耐えきれぬほどだったが、それでも目をあけて、イエズスの栄光とイエズスと共に立っている二人を見た。」（9・32）　この二人は救いの歴史上の重要人物であるモーセとエリアで、神の親しい友としてユダヤの人々を導き、受けた契約に忠実であるよう教え、その預言とわざによって来たるべき救い主を予告した人々です。

●「主よ、私たちがここにいるのはよいことです！」（マテオ17・4）　この光景を目のあたりにして、三人の使徒の驚きがどのようなものであったか想像できます。三人はイエズスの日頃の謙遜な人間性を見慣れていましたから、変容されて光り輝くイエズスを見た時の畏怖と感動はどんなに大きかったことでしょう。三つの幕屋を作りましょう、一つはあなたのため、一つはモーセのため、一つはエリアのために、というペトロの申し出は恩寵とあふれる喜びの瞬間をできるだけ長く続かせたい彼の願いをよく表しています。

「主よ、私たちがここにいるのはよいことです！」タボル山でイエズスは、お気に入りの弟子たちに復活の栄光を予見させ、地上にあって天上を垣間見させ、天国を味あわせられたのです。

「ペトロがなお話し続けていると、光る雲が現れ、雲の中から、『これは私の愛する子、私の心にかなうものである。これに聞け』と声があった。」（マテオ17・5）これは神からのまことの宣言、昔の太祖たちが経験した「公現」を思い起させるものであり、またヨルダン川の岸辺で主の受洗の後に起ったのと同様のことです。その時も、また今回も三位一体の神の現存が啓示されています。御父の声、受肉した御子の姿、光る雲、（それは聖霊のシンボルで、キリストが洗礼を受けた時止まった鳩もそうでした。）使徒たちの感動と喜びは大きな恐れに変り、倒れ伏します。「イエズスは近づいて彼らに触れ、『起きよ、恐れることはない』と言われた。彼らが目を上げてみると、イエズスの他には誰も見あたらなかった。」（同17・7～8）

御変容は私たちのゴール

●変容の秘義が起ったのは、「エルサレムに行って多くの苦しみを受け、殺されて三日目によみがえること」を弟子たちに教え始めたまさにその時のことでした。（マテオ16・21）　弟子たちは不承不承に、苦難の最初の宣言を聞きます。そして、そのことを強調し確認する前に、神なる主はご自分の行動の全てが父なる神の意志に基づくものであるという証明を与えることによって、十字架の屈辱に直面しても弟子たちが動揺しないよう望んでおられます。事実、苦難と死去こそは天にまします御父が、その「愛する御子」をして死から蘇らせ、栄光に入れるための道なのです。これから後、それはまた弟子たちの道ともなります。人間の存在をさいなむ苦難のシンボルである十字架を通らずには、誰も光に到達することはできません。こうして十字架は形を変えて、全人類の罪の贖いの道具となります。弟子たる者は愛によって主に一致し、贖いの苦難に参与します。ですからティモテオへの手紙で聖パウロは次のように励ましています。「神の力に従って、福音のために艱難を忍べ。神が聖なるお召しによって私たちを救い、そして召された。」（IIティモテオ1・8～9）

弟子達はイエズスの日頃の謙遜な人間性を見慣れていたので、光り輝く変容のイエズスを見た時の驚きは大変なものでした。主は復活の栄光を予見させて彼らの信仰を強めようとされたのです。

信者にとって苦しみは一時通過、束の間の状況以外の何物でもありません。使徒は強調します。キリストは「死を滅ぼし、福音によって命と不朽を輝かされた。」（同1・10）

ですから私たちの存在の目的は、変容したメシアの御顔のような輝きです。すなわち主には、救いと幸福、栄光、神への無限の愛があります。このようなゴールを目指すなら、どんな苦難も受ける覚悟ができましょう。この目的があればこそ、私たちの弱い本性を善の要求に合致させようと努めることの意味がわかってきます。また、私たち自身にもあり、霊的旅路の重荷となる利己心や罪のために不幸にも傷つく日々の社会関係にも見受けられるような、肉体的、精神的な限界も考慮にいれな

「聖なるロザリオ」（改訂新版）　ホセマリア・エスクリバー著　定価一二三六円　〒三〇〇円
ロザリオはキリストと聖母マリアの一生を黙想する祈りである。ロザリオの祈りの深さを再発見したい人のために、本書を特にお勧めする。

説教・講話・書簡等の抄訳

ければなりません。

最後に、変容は根本的で超自然的なある変化を期待させます。それはキリストの過越の勝利宣言・十字架と復活の知らせのことです。これこそ変容のキリストであり、復活の後で使徒たちと多くの復活の証人たち自身が目にする、そのキリストなのです。彼らこそ、変容で予告され、キリストの復活と共に始まった新しい世界の証人であります。

●親愛なる皆さん、主の御言葉への忠実と十字架への謙遜な忠誠という信仰の良い戦いに勝つ手段を、イエズスは私たちにお与えになりました。常に福音に聴き入り、秘跡による救いの秘義と聖体祭儀にあずかることによって、キリスト者の新しさを寛大に躊躇なく宣言し、証することができます。でもそれは私たちだけではなく、救いの普遍の秘跡である教会において、キリストの体の一部分としてです。教会とは、キリスト・イエズスを信じ、キリストの選んだ牧者に導かれる人々の一大共同体です。キリストは人類を愛して十二使徒を自らの証人と定め、ペトロの指導のもとに信仰を守護し、主のわざを継続する仕事を委託されました。使徒たちとその後継者は、おのおの教会に生命を捧げましたが、わけても教会の第一は、ペトロの後継者が司牧する、私たちのローマ教会なのです。

（九五・三・七）

ペトロとその後継者

教会シリーズ 21

1

このシリーズの始めに、ペトロの後継者であるローマ司教の使命について述べましたが、ローマの司教がペトロの後継者であることは、イエズス・キリストが弟子たちと教会に委ねられた使命の実現にとってとても重要なことです。

ローマの司教は、「キリストの代理者」として教会の上に「最高・普遍の」（教会憲章22番）権能を持っている、と第二バチカン公会議は教えています。ローマの司教のこの権能は、教父たちが教えるように、司教の権能と同様、奉仕としての性格を持っているのです。

教皇と司教の権能に関して、公会議、中でも第一バチカン公会議は市民法に固有な語句を使用しているため、ローマの司教の使命についての公会議の決定は、教会的に正しい意味において理解され、説明されなければなりません。

教会は、神の救いのご計画を実行するために呼ばれている人々の集まりです。それゆえ、教会の中の権能は、使命の実行に不可欠です。「仕えるための権能」についてイエズスが話されたこと、司牧的指導者について福音が示すことなどを通して、この権能の意味を理解することができるでしょう。ペトロとその後継者の使命が必要とする権能とは、神の助けによって保証された権威ある指導力です。それをイエズスご自身は羊飼いの仕事と呼ばれました。

ローマ教皇は完全・最高の裁治権を行使する

2

フィレンツェ公会議（一四三九）の決定を読み返してみましょう。「今までの公会議の記録と決定事項にあるように、聖なる使徒座とローマ教皇は全世界の首位を占め、使徒たちのかしら聖ペトロの後継者、まことの代理者であり、教会全体の頭、すべてのキリスト信者の父であり、師であり、教皇にはわれわれの主イエズス・キリストがペトロに与えた教会全体を司牧し、統治する全権能が与えられていることを定義する。」(DS 1307)

ローマ教会から分かれた東方教会が首位の問題について主張し続けてきたことは周知のとおりです。再び一致できることを願って、フィレンツェ公会議は、首位の意味を正確に述べました。首位権とは普遍教会への奉仕の任務であり、その奉仕のために相応な権威、すなわち「司牧と統治の完全な権能」が伴っているということです。ただし、東方教会の総大司教の特権と権利を尊重すると述べています。(DS 1308)

これに関して、第一バチカン公会議（一八七〇）は、フィレンツェ公会議の決定を採択し(DS 3060参照)、福音書（ヨハネ1・42、マテオ16・16以下、ヨハネ21・15以下）を引用した後、さらに詳しくこの権能の意味について述べました。ローマ教皇は「検閲と指導の任務」を担っているだけでなく、「信仰と道徳に関することのみならず全世界の教会の規律と統治に関することがらについて、全教会に対して最高の裁治権を有する。」(DS 3064)

ローマ教皇の権能を「検閲と指導の任務」だけに限ろうとする試みがありました。ある人々は、教皇は単に対立を仲裁するだけ、相談と勧告で教会とキリスト信者の自主的活動に一般的な指導を与えるだけにとどめるよう要求しました。しかし、このような制限はキリストがペトロに与えた使命に一致していませんでした。そこで第一バチカン公会議は、教皇の権能が完全であることを強調し、ローマ教皇が「重要な任務を担っている」ことを認めるだけでなく、「全面的な首位権を持っている」ことを認めなければならないと教えました。(DS 3064)

3

教皇の権能の「完全性」は司教団の権能の「完全性」（全面性）を減ずるものでないことは明らかです。しかしながら、教皇も司教団も、共に権能の「完全性」を備えていることも明らかです。教皇は一人でこの権能を有し、教皇の権威のもとに結ばれた司教団は一団としてそれを有します。教皇の権能は、単に数が加算されて生まれたのではなく、司教団の一致と全体性の根本です。

それゆえ公会議は、教皇の権能が「通常、直接に個々の教会およびその全体、個々の牧者と信者およびその全体に及ぶものである」(DS 3064) と強調しました。「通常」というのは、それが司教たちから委託されたのではなく、ローマ教皇に属する役務に固有なものであるからです。また「直接に」というのは、教皇がその権能を司教の許可や仲介なしで直接に行使することができるからです。

しかし、第一バチカン公会議は、部分（地方）教会に日常的な介入をする権能と責任をローマ教皇に帰してはいません。それは、教皇に規準を課し、首位権の行使を制限することを避けるためです。「ローマ教皇のこの権能は、各司教の直接で通常の裁治権を妨害するものではない。各司教は聖霊によって使徒の後継者として任命され、自分に託された羊の群を、個々の部分教会の牧者として司牧統治する。…」(DS 3061)

（次号に続きます。）

不変の教え

五月の苦しみは何のため？

（教皇様は退院後はじめてのアンジェルスの祈りを聖ペトロ広場で行われた。）

数週間の入院のあと、ようやく私の日常の仕事の場であるこの場所で、再び皆さんにお目にかかれることを主に感謝します。この場を借りて、この何日か私の世話をしてくださった方々に御礼を申し上げたいと思います。先生方、看護婦の方々、シスター方、病院及びバチカンの職員の皆さん。またローマ、イタリア、全世界からいろいろな方法で私を励まし、祈ってくれた全ての人々にも心から感謝します。

本日は三位一体の祝日で、神の秘義を黙想するよい機会ですが、キリストはそれを偉大な秘義、私たちの考えをはるかに超えるものではあるが、心の奥底に親しく語りかける秘義として示されました。神の秘義とは、本質的に言って聖ヨハネのあの意味深い表現「神は愛である」ことを示すものに他ならないからです。

愛であるからこそ神はただお一人ではおられず、また本性は唯一独自であっても三つのペルソナが内在しています。愛の本質は、自らを与えることです。無限の愛である神はご自分を完全に御子に与え、人格的な一致の絆である聖霊のうちに、御子との永遠の愛の対話を続けられる御父です。

何とすばらしい秘義でしょう！今年は家族年ですから、私はこの秘義を特に家族に向かって示したいのです。三位一体には人間の家族というもののもともとの姿を見ることができます。『家族への手紙』にも書いたように、神の「われわれ」は、一人の男と一人の女が互いに自己を与え合い、生命に向かって開かれた解消不可能な交わりを作り上げる人間の「私たち」にとって、永遠の模範となります。（6番参照）

もうすぐキリストの聖体の祝日ですが、教会は聖体こそ教会生命の源であり、頂点であることを心得ています。聖体において教会はキリストの贖いのいけにえを再体験し、その御体で養われるのです。教会が人間と神、また人間同士の一致の秘跡（教会憲章1番参照）となるために必要な奉仕と交わりの精神を学ぶのも、聖体からです。（…）

マリア月の終りにあたり、特に愛を込めてマリアを見つめましょう。この一ヶ月間マリアに目を注ぎ、全人類の願いと嘆願と涙を御母の胸にあずけてきました。憐れみの御母マリアがキリスト信者の祈りに耳を傾けてくださいますように。とりわけ若者たちと家族に御目を向け、全人類、特に不幸にも戦争のさ中にある国々のために、平和という無上の贈り物を得てくださいますように。

またマリアを通して、今私は五月のマリア月につながる苦しみの賜が与えられたことを感謝したいと思います。ありがとうございます。これは必要不可欠な賜なのです。教皇は四週間というもの、聖ペトロ広場に面したこの窓を去って病院にとどまらねばなりませんでした。苦しまなければならなかったのです。十三年前と同じように。入院中、私はこのことについて黙想し、何度も思い巡らせました。私と同郷の故枢機卿の言葉がよみがえってきました。（昨日は彼の十三回忌でした。）教皇職についた当時、枢機卿は私に言いました。「主がお呼びならば、あなたは紀元二千年に向けて教会を導かなければならない。」　枢機卿自身、キリスト教が伝えられて千年目を迎えるポーランド教会を導いた人でした。

私は紀元二千年に向けてキリストの教会を導かなければなりません。祈りによって、種々のプログラムによって…でもそれだけでは足りません。苦しみが必要なのです。十三年前に受けた襲撃、そして今回のような新たな犠牲が。なぜ今、今年の家族年に？　それはまさしく、家庭が脅かされているから、家庭が攻撃を受けているからです。だから教皇も攻撃を受け、苦しまねばなりません。それを見て全ての家庭が、あえて言うなら「より高い福音」を見出すことでしょう。それは苦しみの福音、個々の、また全ての家庭の来たるべき紀元二千年に備えるものです。

皆さんとの祈りのひとときに、以上のような考察を加えました。苦しみの賜をいただいたことを聖母に感謝しているからです。大切なことですから、世界中の有力者の人々にも伝えたいと思います。何について？　苦しみというテーマが私には委ねられました。人々に聞かせたいのです。理解してください。なぜ再び教皇が病院にいて、苦しまねばならなかったのか。よく考えてみてください！

皆さんの心づかいに感謝します。また一緒にアンジェルスの祈りを唱えられることを感謝します。（五・二九）

教皇様の動き

●5・27　「カトリック教会のカテキズム」英語版が、英語使用地域の司教たちから贈呈され、教皇様はメッセージを送られた。「このカテキズムは神の民の一致と普遍性に貢献します。カテキズムが人々の間で広く知られ、用いられるよう心を砕く、皆さんの努力に感謝します。」

●6・4　シエナで開かれたイタリア聖体大会に出席できなかった教皇様は、メッセージを送られた。「未来は神の御旨のうちに、でも私たちの手にも委ねられています。社会の中で使徒たるべきキリスト者は、聖体から力と勇気を引き出しつつ、社会と道徳の発展のために働かねばなりません。」

●6・5　聖体大会閉会式に向けてのメッセージ。「信仰をもって聖体を礼拝する人は、使徒トマのように『私の主よ、私の神よ！』と叫んでいるのと同じです。」

●6・13　教皇就任以来五回目の全枢機卿会議をローマで召集された。開会に当たって教皇様は、教皇庁、教会一致運動と宗教間の対話、司祭の召命、聖性の必要その他についてお話しになり、最後に言われた。「西方カトリック教会と東方正教会との一致は、おそらく紀元二千年という時点の最大の課題です。これまでの千年間、不幸にもそうであったように分裂したままの状態で、歴史の主キリストの御前に出るわけにはいきません。分裂を和解と調和に取って替えなければなりません。」

●6・15　水曜日の一般謁見で恒例のカテケージスを続けられる。「治りたいという願いに励まされた病人のキリストへの信仰は、もっと価値ある霊的な救いをもたらすことを主は教えようと望まれたのです。」

「教皇様の声」　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月十日発行　■定価　一部八十円　送料実費　■一年予約九百円　送料七百円　■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替
神戸
3-72393